

# コロナ禍

日 新 聞

## 見えたものは

### 不要不急と必要の間 経済成長で得られぬ 生を充実させるもの

を軸にしたグローバル競争の時代だという。

この1年やがて暮れようとしていた。今年は、あまり季節感がなかった。とはいえ、自然の方は着実に時を刻んでいるようで、少し前には紅や黄にそまっていた木々はすっかり葉を落としていた。

新型コロナ禍(もしくは騒動)については、この欄でも2回ほど書いたし、また別の媒体にも何度か書いた。おおよそ書きつくしたはずなのに、それでもまだ論じてみたいことはたくさんある。

この騒動の中で様々な言葉が飛び交ったが、気になったひとつは「不要不急」の4文字であった。

「不要不急」の4文字であった。「不要不急」の4文字であった。「不要不急」の4文字であった。「不要不急」の4文字であった。

「不要不急」の4文字であった。「不要不急」の4文字であった。「不要不急」の4文字であった。「不要不急」の4文字であった。

「不要不急」の4文字であった。「不要不急」の4文字であった。「不要不急」の4文字であった。「不要不急」の4文字であった。

「不要不急」の4文字であった。「不要不急」の4文字であった。「不要不急」の4文字であった。「不要不急」の4文字であった。

「不要不急」の4文字であった。「不要不急」の4文字であった。「不要不急」の4文字であった。「不要不急」の4文字であった。

「不要不急」の4文字であった。「不要不急」の4文字であった。「不要不急」の4文字であった。「不要不急」の4文字であった。

「不要不急」の4文字であった。「不要不急」の4文字であった。「不要不急」の4文字であった。「不要不急」の4文字であった。

## 無限の欲望で

### 失った大事なものを

それは、あの豪華客船のような複雑な船とはおさらばでき、ドイツ・ニーランドのような退屈なアマミューズメントパークが大打撃を受けたことだ、といっている。

これほど物騒なことをいう気は私にはないし、「不要不急」が不要不急とは思わないが、彼の言い分を付度すれば、「不要不急」にも様々あるといえることだろう。万事を市場の力に委ねて、利潤原理と経済成長への寄与のみ評価してはならない、ということだ。ここには、本来、価値の選択がからんでくる、といいたいのである。

人はただ生存のためだけに生きるものではない。古代ローマ人は「パンとサーカス」といった。この社会には「パン」のみならず「サーカス」も必要なのである。

「サーカス」も必要なのである。生存に関わる生だけではなく、精神や身体の愉楽や刺激が必要であり、人々が集まって騒ぐことも必要なのだ。時には、まがまがいなものも人は求める。謹厳実直・清廉潔白に生きるだけが人の生ではない。古代ローマ人は、巨大な闘技場を造って剣闘士と猛獣の戦いを見物していたのである。

「サーカス」は「生存」にとつては無駄なもの、過剰なものである。必要なものではない。だが、この過剰性こそが文化を生み出した。「パン」という必要が「経済」の基礎だとすれば、「サーカス」は「文化」の基礎であった。古代ローマ人は「サーカス」だけではなく、巨大都市を、建築を、美術を、文芸を、それに風呂や道路や水路などの公共建造物も生み出したのである。ここにその国に特有の価値観や文化が形成された。人を動物から区別するのは、ただ生存のための食料の確保ではな

く、「文化」という無駄なものを生み出し、そのために過剰なエネルギーを投入する点こそある。だからこそ、過剰なエネルギーをどう使うかは、その国の文化にとってきわめて重要な事項となる。にもかかわらず、今日、芸術も、科学も、エンターテインメントもすべて同じ経済原理のもとに置かれてしまった。「不要不急」と「必要」は地続きになってしまいい、あらゆる種類の「文化」が「経済」に従属することになった。

く、「文化」という無駄なものを生み出し、そのために過剰なエネルギーを投入する点こそある。

だからこそ、過剰なエネルギーをどう使うかは、その国の文化にとってきわめて重要な事項となる。

にもかかわらず、今日、芸術も、科学も、エンターテインメントもすべて同じ経済原理のもとに置かれてしまった。「不要不急」と「必要」は地続きになってしまいい、あらゆる種類の「文化」が「経済」に従属することになった。

市場経済は、「不要不急」と「必要」を区別することなく、いっさいを「必要」とみなすばかりではない。なぜなら、人々の欲望は無限であり、資源は有限である限り、市場で提供されるものはすべて人々が求めるものだからである。そこに善いも悪いもない。欲望に対して資源は常に希少であり、それを言い換えば、経済とは「希少性を処理する方法」ということになる。

まさにそれが今日の経済学の考え方なのである。経済学とは「希少性の処理」をめぐる研究であり、希少性のもとで人々の欲望の最大化を論じるものとされる。

こうして、われわれは何かきわめて大事なものの見方を見失っていった。それは、「生存」の必要を超えた「過剰なもの」をどのように有効に使い、どう活用するかというような問題のたて方である。「過剰性の経済学」といってもよいであろう。「不要不急とは何か」、あるいは「何が不要不急なのか」という問いはきわめて重要なのである。生存の確保だけではなく、いかなる生、いかなる社会をわれわれは望ましいと考える、いかなる文化を残すかという価値をめぐる問いがそこにはある。

ところが、「過剰性の経済学」ではなく「希少性の経済学」の立場にたつと、日々の食料も、必要な住居も、巨大クルーズ船も、アマミューズメントも、「夜の街関連」も

すべてが、希少資源のもとでの欲望充足の次元で並べられ、利益や収益だけが関心の対象になる。また同時に、「希少性の経済学」に従えば、人は、より大きな欲望の充足を求めて、経済を無限に成長させようとするだろう。世界中を歩き、あらゆる情報を手に入れ、常に誰とでもつながり、人間の能力を超えた未知の次元にまで足を踏み込もうとする。自由、富、情報、空間、人間能力の無限の拡張が始まる。「拡大」こそが現代のキーワードとなる。

かくて「無限の欲望」と「希少な資源」を前提とする限り、インベーションと経済成長主義だけが唯一の解決策となるだろう。「必要」と「不要不急」の区別は見えなくなり、「必要」をはるかに超えて、ますます「過剰なもの(不要不急)」は生産され続け、人はそれを追い求め、経済を拡大する。

だが今回のコロナ騒動は、はからずも「必要」と「不要不急」の区別を前景へと押し出した。確かに、この区別はいま以前にはなかった。だがそれでも、われわれは、何が必要で何が不要不急かを改めて問うた。人は最低限の「必要」だけで生きていくわけではない。しかしまた、「不要不急」の無限の拡大は、人の生から本当に必要なものを奪い去りかねない。そしてわれわれは「必要なもの」と「不要なもの」の間に、実は、「大事なもの」があることを知った。

信頼できる人間関係、安心できる場所、地域の生活空間、なじみの店、医療や介護の体制、公共交通、大切な書物や音楽、安心できる街路、四季の風景、澄んだ大気、大切な思い出。

これらは市場で取引され、利潤原理で評価できるものではない。またいくら「不要不急」を市場で拡張し、経済を成長させても得られるものではない。むしろ過度な市場競争と経済の拡張がその障害になりかねないであろう。「必要」も「不要不急」も、この「大事なもの」によって支えられ、またそれを支えるべきものである。

生の充実には、活動の適当なサイズがある。われわれは、物事にはすべて適切な大きさや程度があり、無限の拡大がよいわけではない、という実に当然の考えを忘れてしまった。その結果、「大事なもの」を随分と失い、傷つけてきたのではなからうか。

◇佐伯さんの「異論のススメ」スベシャルは随時、掲載します。

さ え き けい し  
佐伯 啓思

1949年生まれ。京都大学名誉教授。保守の立場から様々な事象を論じる。著書に「近代の虚妄」など。思想誌「ひらく」の監修も務める。